2015.9.13　年間第２４主日

わたしの後に従いたい者

マルコによる福音　8:27-35

（そのとき、）イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方の方々の村にお出かけになった。その途中、弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と言われた。弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた。

　それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」それから、群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。」

説教

血肉によってイエスを理解する？

これではだめで、イエスと同じところにたって、イエスと同じところから神のことばを聞くと、福音を聞き分けるということが起こります。（聞き分けるとは、なんかわからないけどみことばが身にしみるというか、いままでとは違った理解ができること）そこではじめてイエスの精神が、イエスの性格が分かる、伝わってくるとい

うことが起きます。きょうのペトロの信仰告白「あなたは、メシアです」はペトロがイエスの弟子として、ずっーといっしょにいるからではなく（つまり血肉にたよってではなく）神のことばがその時のペトロにはイエスと同じように聞こえたからこそ、信仰告白ができたのです。このいわば根元（ひとつはイエスと同じように低みに立つ）が抜け落ちてしまうとサドカイ人、ファリサイ人に落ちていくわけです。だからイエスは受難告知をします。この苦しむメシア、受難のイメージがわかっていないと、理解されていなければ、信仰告白が嘘になるわけです。
そして案の定、ペトロはイエスに向かってへんなこというな、縁起が悪いじゃないか？などブツブツとイエスを諌めます。一方イエスはサタン出て行けってペトロを叱ります。

きょうの福音を箇条書きにするとこうなります。

１）わたしは何者か？⇒イエスの問いかけ
２）あなたはメシアです（信仰告白）⇒ペトロの反応
３）このことは誰にもいうな⇒メシアの秘密
４）受難予告⇒イエスは受難の前に何回か予告をしている、そのうちの一つ
５）ペトロのいさめ⇒ペトロの信仰告白をイエスが試した？
６）ペトロへの叱責（さがれサタン）
７）教訓　自分を捨てろ、自分の十字架を負え、命を救いたいものは失う、福音のために命を失うものは命を救う。⇒意味は多様に解釈可能

あなたはメシアです、これは信仰告白。

この信仰告白はクリスチャンは受洗するときに尋ねられ、そして答えます。でも洗礼は儀式であって悪く言えば形式、ほんとうにイエスを信じるのか、メシア、キリストを信じるのかをわかって答えているわけではない。（洗礼前

に勉強会があってそこで詳しく説明は受けるのですが、だいたい難しくてよく理解できない勉強会が多い）ハイ、信じますと答えないと洗礼を授かることができないのでいいえとは言わない約束というか、決め事、つまり形式になっています。

そのこと（信仰告白＝イエスはメシア）は誰にも話すな（30 節）

それをいったらおしまいよ、という台詞はフーテンの寅さんの決まり文句ですが、この意味あいでイエスは口止めしているわけではありません。このイエスの口止めを、口に出したら嘘になる、という意味合いで捉えてみるとどうなるでしょう。口に出すとなんか嘘っぽくなってしまう、このような経験、みなさんはありませんか。

このイエスの口止めを先週はメシアの秘密なんてかっこうをつけて解説した振りをしましたが、イエスはキリスト（メシア）だ、という信仰を告白（悪く言えば白状）することばは軽いものではないです。極端な言い方をすれば、ただの一度きりのことばとしてある。儀式としては毎度繰り返してもいいのでしょうが、本気でいうことは一回か二回、イエスが存命した時代では特にそうであったはずです。江戸時代の日本でも踏み絵という宗教裁判があって信仰告白すると死刑、告白しなければ釈放だったようです。でも一回セーフになっても毎年繰り返し踏み絵の裁判はあり、毎年毎年、踏み絵を踏まされる本気の信者にとっては本当に困ったことだったとおもいます。それは本当のことをいえば、つまりイエスはキリストだといえば死刑になってこの苦しみから逃れられる、でも死んでしまうことがみこころなのか、それとも生き延びてイエスを宣教することが使命なのか？たとえばですが、このような「生き死に」のジレンマがあります。

安部総理は救い主である、なんて告白する者がいたら、笑いものか、心神喪失者か、嘘つきです。でも実際に安部総理のまえにでて、テレビに映っているあの顔でわたしは何者であるかと問い詰められたらけっこうメシア（救い主）です、なんていってしまうかもしれない。まあ、これは笑い話ですむの

ですが、笑えないのが牧師が信徒をつかまえて裁くとき、牧師がおためごかしに愛情たっぷりに諭す、裁くとしたらそれはイエス、神を気取っているということです。最近はこのようなことを総称して、ひっくるめてパワーハラスメントという言葉があります。いじめられる方、平信徒には便利なことばなので覚えておくといいですよ。いざその時に役に立ちます。

わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。（34-35 節）

わかりずらいみことばだと思います。大事なことをいっているような気はするのですが、どういう意味なのかがはっきりしてこない。これは殉教をすすめていると受け止めることもできますが、それでは単純すぎるとわたしはおもいます。

人はイエスと同じところに立つことができます、それは高みに立つことではなく、低いところだからです。偉くなるのはむずかしい、高いところ、高い地位に登りつめるのは一握りの人です。でもそうはいかない、つまり大多数の人は低みにいるのです。これはイエスの取られた立場、低みに立つ立場です。偉そうに高みたってものをいうのではなく、低みから、イエスと同じところから神のことばを聞くと、そのとき初めて福音＝みことばを聞き分けることができます。そこにいたって初めて、自分の十字架を背負うことができます。

イエスさまはわたしたちの罪のために十字架に架かって死んでくれた。イエスを信じるということはそれを信じるということだ。これはもっともな信仰で文句のつけようがありません。イエスを信じる、イエスにすがる、どっちも人の目からみたら同じようなものでしょう。

でも、ただただイエスの十字架にすがっているだけなのに、自分は自分の十字架を背負っていると勘違いすることがけっこうあります。これには注意しましょうね。